

第13回 幸福師匠！おーえん会（報告）

令和7年3月8日（土）に岐阜市神田町の喫茶店星時で「登龍亭幸福・旭堂鱗林二人会」が開かれました。今回は9人のメンバーが参加しました。

○登龍亭幸福師匠の一席目の落語は、『平林』でした。

はじめに：★ある商家の旦那が丁稚の定吉を呼び、急ぎ、隣町の平林（ひらばやし）さん
に手紙を届け、返事を直ぐに貰って来て欲しいと言う。手紙の宛名には「平林」と書かれてい
るものの、定吉は祖父の代から字が読めないことを理由に行かないと言う。旦那は、文字が
読めない定吉に、忘れないようにずう〜と、「ヒラバヤシさん、ヒラバヤシさん」と、口の中
で言って行きなさいと智恵を授ける。「ヒラバヤシ、ヒラバヤシ」と唱えながら、目的地
に向かうものの結局、ふとしたことで忘れてしまう。

あらすじ：★

旦那「定吉(さだきち)や！ 定吉」。

定吉「はい。 えー、何ですか、旦那様」。

旦那「あー、お前、済まないけどもな、この手紙をなあ、橋を渡った平河町(ひらかわちよ
う)の平林(ひらばやし)さんのところへ届けておくれ」。

定吉「あっ、そうですか、分かりました。今、私、お風呂沸かす番なんです。もうすぐ沸き
ますので沸いたら行ってきます」。

旦那「あー、そうか、そうか。お前がお風呂番だったか。ご苦労だったな。それは、他の者
に見させておくから。急ぎだから、その手紙を先に届けてきておくれ」。

定吉「あー、そうですか、分かりました。じゃあ、行ってきます。この手紙何処に届けるん
ですか？」

旦那「だから、平河町の平林さん」。

定吉「あ、分かりました。お風呂の方はお願いしましたよ。グラグラ煮え立って、後からう
めると奥様に怒られるんです。よく言って置いてくださいよ」。

旦那「お前の粗相にならないようにしておくよ。早く行ってきな」。

定吉「え〜、旦那、これどこに届けるんですか」。

旦那「先っきから、平河町の平林さんと言っているだろう。お前は どうして そう忘れっぽい
んだ。 そうだ、 忘れたら、手紙の表に名前が書いてあるだろ、それを読めば良い」。

定吉「それが、まるで、字が読めないんですよ」。

(手紙の宛名には「平林」と書かれているものの、祖父の代から字が読めないことを理由に
行かないと言う。)

旦那「しょうが無いな。それでは、他のことを考えないで、ず〜っと平林さん、平林さんと、
口の中で言って行きな」。

定吉「分かりました。旦那は頭が良いな」。

旦那「気をつけて、行ってきな」。

(定吉は、「ヒラバヤシさん、ヒラバヤシさん」と言いながら歩いていて、うっかり赤信号
で横断歩道を渡りそうになり、お巡りさんに呼び止められて、「ちゃんと信号を見て渡らな
ければいけない。信号は赤になったら渡ってはいけない。赤止まりの青歩き」と注意をされ
てしまった。)

定吉「赤止まりの青歩き、赤止まりの青歩き」

(ブツブツつぶやきながら歩いていた定吉は、いつの間にか、どうもこんな名前じゃなかつ
たと気づいて、通りかがかりの人に手紙の宛名を読んでもらう。)

通り人1「タイラバヤシだ」

(今度は「タイラバヤシ、タイラバヤシ」と声に出してみると、どうも違うような気がして、
別な人を捕まえて聞いてみると。

通り人2「ヒラリンでしょ」。

(実は彼も文字をあまり読めず、違和感を覚えながらも今度は「ヒラリン」を繰り返しながら進み、目的地近くまで来た所で、近くにいた人に)

定吉「ヒラリンさんのお宅を知りませんか？」

(と手紙を見せて尋ねる。聞いてみると相手もまた「字が読めない」)

通り人3「それでは字に色気を付けて読む、ヒトツトヤツツデトッキッキ」。

(また違うような気がして、通りかかった老人に聞いてみると)

通り人4「イチハチジュウノモクモク(一八十の木木)じゃ」

(と読むと教える。これも違うような気がして、同じ様に他の者に聞く)

通り人5「ヒトツトヤツツデトッキッキ(一つと八つで十つ木つ木)」

(と定吉に言う。困った定吉は、それなら全部言いながら歩けば、これを聞いた誰かが気づいて教えてくれるだろうと、思い出す名前を「タイラバヤシかヒラリンか、イチハチジュウノモクモク、ヒトツトヤツツデトッキッキ」とリズムカルに歌いながら歩く、やがて定吉の周りに人だかりができる。そこを通りかかった、定吉と顔見知りの職人の男が駆け寄って来る、定吉はお使いの行き先がわからなくなったと職人に訴える。職人がその手紙を誰に届けるんだと聞くと、定吉は橋を渡った平河町に届けると答える。手紙の宛名を見た職人は、)

通行人6「ヒラバヤシと読むのだ、それは俺んところだ」

定吉「そうでした、ヒラバヤシさんでした。」

参考情報:

★◎1. 幸福師匠の噺にのめり込んで中身はすっかり忘れてしまいました。それでネットの力を借りて検索を開始、『BOOKTIMESについて、落語『平林』あらすじ!噺家によるサゲの違いまで!』に辿り着きました。荒筋が書いて有り(ネット著作権が保持され、このページから引用したものである旨の出典を明記すれば、改変自由で無料とありました。また別の引用元としては「東西落語特選」とお願いします。URLとし

て”<http://www.niji.or.jp/home/dingo/rakugo2/>”も併記していただければありがたいとあったので、参考にしました。従って、大体の荒筋はあっていると思います。しかし年を取るとは嫌なものです、幸福師匠の落語と少し違ったかもしれません?

★◎2. 実は、この原噺については、安楽庵策伝が寛永5年(1628)に出版した笑噺本『醒睡笑(せいすいしょう)』の一編「推はちがうた」にあることも分かりました。安楽庵策伝は岐阜市三輪釈迦地域の「浄音寺」の住職をつめていた事もあり、ご当地との因縁が有り興味深い演目でした。また、安楽庵策伝『醒睡笑』は、作者が幼年時代から聞いていた笑噺・奇談などを京都所司代板倉重宗の所望によって、元和9年(1623)、滑稽味を加えて書きおろしたものとわれ、寛永(1624~1644)年間に抄出本(略本)3冊(8巻8冊)を刊行しました。岩波文庫安楽庵策伝著・鈴木棠三『醒睡笑(下)』の一編「推(する)はちがうた」の7に平林のよみ方に現代語版があります。噺の時代設定は、お巡りさんがいて信号がありますから、時代が下り明治時代後期位でしょう。噺家によってはポストに投函すればと言います。定吉でも分かることですから人々には郵便が深く周知されていたのでしょう。でも急ぐと言っても、まだスマホも無く電噺も引けていない時代でした。実に落語は面白い。

○登龍亭幸福師匠の第二席目の落語は、『二番煎じ』でした。

はじめに:★江戸の町では火事が頻発し、特に冬場は空気が乾燥していたため、町ごとに「夜回り」が行われ火の用心が重要視されていました。夜になると町内の方々が「火の用心!」の掛け声の後にコンコンと拍子木を打って回っていた光景ですね。昔は町内に番所があり、番太郎がいて夜回りをしていましたが、寒さのためお酒を持ち込んで酔っ払って寝てしまったり、寒いので夜回りをさぼったりすることが多かったそうです。そこで町内の旦那連中

が集まり代わりに夜回りをすることもしばしば見受けられ、またそれを見回る町役人もいたそうです。

ある晩、防火のための夜回りを町内の旦那衆が代わりに行うことになり、あまりにも冷えるので、**月番の旦那（リーダー）**の提案で夜回りをこんなに大勢でなく、二班に分けて交代で回ろうと持ちかける。そうすれば一方が回っている間は、片方は暖かい番所の中で休めるので皆は大賛成だ。早速**月番の旦那**がチームを編成し、最初の班が夜回りに出かけ、残った班は番所で暖を取りながら待っていると言う具合になった。

それでは、夜回りに出発です。あまりにも寒いので**提灯係の宗助さん**を始め誰も「火の用心！」の掛け声がない。**月番の旦那**が、**謡の旦那**に掛け声を出すようお願いすると、吉原で夜回りをしたことがある**謡の旦那**はさすが経験者で「火の用心 さっしやりやしよう」といい調子だが、「火の用心！」とならず「ひ～の～よう～じん」と謡の口調や都々逸調、浪曲調になる始末。最後の方が少し揺れて途切れ途切れになる感じだ。北風に向って掛け声が震えているのだと言う。**拍子木係のお師匠さん**は、拍子木は着物の袖に仕舞い込んでコンコンとやるものですから全く響かない。**鳴子係の旦那さん**は、鳴子は横着をして鳴子の紐を帯につけてぶら下がった鳴子を膝で打つ始末。**金棒係の辰っあん**は金棒を引きずるのでほとんど音は聞こえない。そんなこんなで寒風の吹きさらしの中、すっかり冷え切って一回りを終え番所へ戻ると、二組目が出発する。こんな調子で、とりあえず番所までたどり着き次の班にバトンタッチ。

月番の旦那は、**宗助さん**に火鉢にもっと炭を入れろと催促する。そして番所のすきま風が入らないようにゴザを立てかけるように言いつけ、とにもかくにも冷え切った体を温めようと、火鉢に手をかざして暖を取っていると、誰かが「出掛けに娘が持たせてくれた」とお酒の入った瓢箪を出す。「そんな物に酒を入れてどうすんだい」。娘が体が暖まるものをも持たせてくれたのだと言う。

月番の旦那「あなたね、どうしてそう言うものを持ってくるんだね。ここをどこだと思ってるんだい」と、「番所に酒なんか持込んで心得違いもはなはだしい」なんて言いながら「土びんに入った風邪の煎じ薬ならさしつかえない」と、「土びんの中にお茶が入ってるだろ。それを捨てちゃってね。それにいれたらどうだい」と、**宗助さん**に土びんのお茶を開けさせその中に酒を入れさせる。するとあちこちから自分も酒を持ってきたと差し出す。皆、考えることは同じだ。

月番の旦那「皆さんバカな事を言うね。冷で飲んだら体に毒だから爛していただくんだよ。土びんに入れときゃお役人が来たってわかりゃしないよ。実はね私も持て来たんですよ。宗助さん、そこの戸に突っ張り棒を指しといて」すると、もう一人が「実はあっしは酒の肴に猪の肉を持ってきたんで。」

月番の旦那「「猪の肉！あなた気が利いてますよ。でもね、鍋がないじゃないか。」、「鍋は背中に背負ってきました。」と絆纏を脱ぐと背中に鍋がある。

番所に戻って、みんなの気持ちが同じと分かり「お酒」と「鍋」で体を温めたい！と。厳しい寒さに耐えながら夜回りをした一同は番所で火鉢を囲んで暖をとる。ある者は酒を、ある者は猪の肉、ねぎ、味噌を出してきた。鍋は背中に背負っている。早速酒盛りが始まる。皆寒いところから帰ってきたのですぐ酔いが回っていい気分になる。都々逸の回しっこをやろうなんて言う旦那も現れてくる。皆で回し飲みをしながら獅子鍋をつつき宴会を始めます。お酒を飲むために、夜回りに行ってきたようなもので、結局はみんなお酒が大好きなんです。笑い声や宴会の騒ぎが次第に大きくなり、他の町民には気づかれないようにしようとしませんが、隠しきれません。宴会が進む中で、酒が進み、次第に酔っ払っていきます。その時、突然、「バンバン」と言う戸を叩く音が聞こえてくる。横丁の犬が猪の肉の匂いを嗅ぎつけやって来たと思い。

月番の旦那「犬か何かだろうよ!シッシッ!!」と。すると、さらに戸が叩かれ、それが町役人が番所を訪れた事を知ると、旦那たちは驚き、宴会騒ぎが見つかってしまうと慌てます。さあ大変だ見回りの役人がやって来た。

町役人「番はおるか!番は何をしている。早く戸を開けよ!!」なんと、このタイミングで町役人が見回りに来てしまった。戸を開けると「拙者が戸を叩いた時にシッシッと申したな」、それは何かと聞く。その時、宗助さんが火鉢の上に座って猪鍋を隠すが、酒は隠しきれない。

月番の旦那「滅相もございません。あれはこの宗助さんが・・・寒いので火、火(ひっひっ)と言ったのでございます。」と、苦しい言い訳をする。

町役人「さっき土びんのような物を片付けたようだがあれはなんだ」と更に追い討ちをかける。

月番の旦那「この宗助さんが風邪気味なもので煎じ薬を飲んでおりました。土びんの中は・・・煎じ薬の口直しです」なんでも宗助さんのせいにするが、仕方なく土びんを出す。

町役人「そうか、身共もこのところ風邪気味じゃ、ならば拙者もその煎じ薬とやらをもらおうか」と言って湯飲みを口にする。酒だと気づいた町役人だがそのことは言わず、「うむ、結構な薬だ」と言ってグイッと飲み干す。「この煎じ薬は本当に効くのか?もう一杯試してみよう」とおかわりを所望し、グイグイと飲み始め、そう「寒い時にはもってこいの煎じ薬だ」なんて言う始末。そう言えば「鍋のようなものもあつたな」と。鍋にも目ざとく見つけられ、宗助さんは股下に隠した猪の鍋を観念して差し出す。これもべろりと平らげてしまう。すっかり調子に乗った町役人はもう一杯とせがむが、旦那連中からこれ以上飲まれたら自分達の分が無くなってしまふからもう断ってしまえと言われて、

月番の旦那「もう煎じ薬は、一滴もございません」と告げると、

町役人「無い!!、無いとあらばいたし方ない。では拙者が町内をひと回りしてまいるので、その間に、二番を煎じておけ」

参考情報:

★◎1. 二番煎じは、前半の楽しさと後半の楽しさがある噺が軽妙で、前半は、夜回りの5人が寒さを凌ぎながら、特徴のある「火の用心」の掛け声や道具をいい加減に扱う様を描いています。江戸の町には火付盗賊改、町奉行、同心などの役職があり、火事や盗賊に備えた見回りが日常的に行われていました。この噺では旦那衆が酒盛りを楽しんでいるところへ、猪鍋の匂いに気づき、町役人が見回りに来ます。旦那衆が困っているのを知りながらも酒を煎じ薬と称して吞んでしまいます。これは、厳しい規律の中にも庶民と町役人との絶妙な距離感があり、本来、役人の仕事は町の治安維持ですが、彼らもまた庶民の生活に馴染んでいることが伝わります。「二番を煎じておけ」と融通が利く江戸のしゃれっ気を感じさせる場面です。お酒と知りつつ煎じ薬と言われて、何も咎めずに飲むと言う、このお咎めなしの部分が落語の噺として平等感あふれる良い所ですね。

★◎2. 猪鍋(しし鍋)は、江戸時代は肉食がタブー視されていたが、獣肉は「薬」として食べることが許されていました。特に猪肉は「山鯨(やまくじら)」と呼ばれ、滋養強壮に良いとされていました。番所は本来、飲酒をする場ではなかったのですが、寒さ対策と称して酒を持ち込むことがあったそうです。噺の中で旦那衆は、夜回りの合間に番所で鍋を囲み、熱燗を飲みながら体を温めます。この猪鍋と酒が、物語のオチにつながっていきます。季節感にあふれ、外の寒さと番所の中のにぎやかで暖かそうな場面の好対照が見事ですね。猪をシシ、犬を追い払うシッシッ、火(ひ)をシと発音する当たり、言葉遊びも有るのでしょうか。雰囲気醸し出す芸を通して番所の様子が目に浮び、冬の寒さが一層際立ってきます。役人に咎を受けないか心配しつつ、町役人もきびしく叱ったりしないで一緒に楽しむのも人情味がありますね。幸福師匠の「旦那や町役人が酒を飲む飲みっぷり良く」、またその「酔っ払い方」はこの芸の見せどころでしょう。猪の熱い肉を食べるところもさすがでした。

★◎3. 東西落語散歩、演目表（落語散歩）を参考に思い出しながらまとめました。
<http://sakamitisampo.g.dgdg.jp/index.html>



○次回の「幸福師匠お一えん会」の紹介。

落語や講談といった日本の伝統噺芸を楽しむため、岐阜東高等学校同窓会では、「幸福師匠お一えん会」を支援しております。岐阜市神田の喫茶店「星時（ほしどき）」で開かれている「二人会」にお邪魔をし、伝統噺芸を広めていきます。老若男女どなたでも参加でき、日本の伝統噺芸の面白さや意味の深さを知る機会を提供します。

次回は来令和7年6月7日土曜日7時（木戸銭2,500円、物価上昇の折不確定情報です）から星時で開催されます。「幸福師匠お一えん会」ではまとめて席をお取りしておりますので、ぜひ、生（なま）の落語・講談を聴きたいと思われる方はご連絡下さい。

「幸福師匠お一えん会」 代表 坂井至通（12期卒）